

動史上の重大なる記録を作れりと思惟さるゝに不拘らず、雑誌に於ても殆ど論議さるゝことなきに對し、對世間的反響の比較的小なりしに反し、神戸労働争議は、言論機關に於て前例なき盛んに掲載論議せられたり。是に關する單行の出版物すら刊行せられし見觀を呈せり。之れ即ち後者が集團の大と、持久の長さ、に於て我國に前例を見ざりしと共に、賀川豊彦なる一個人の名を中心とする労働階級の運動に一般社會をして凝視せしめしもの故なるべし。神戸争議に關して中央の研究者は賀川氏の無抵抗主義と労働者の争議後の意識との關係に深甚なる興味を懷けり。賀川氏の無抵抗主義が極度に發揮せられしは七月二十九日新聞地に於ける流血の事件と、其夜の川崎争議團本部に(美術俱樂部)に於ける態度にして、美術俱樂部の幹部會に約三十名の刑事が十手を振り翳して之を襲ひ片端より十手の打撃を加ふるや、賀川氏は「坐せしと命令し、八十餘幹部は拱手して縛に就き」縛せる繩は労働者が運動會に使用したるもの靴を穿くことすらも許されずして引致されたり。東京辯護士團の調査に依れば其夜刑事の爲に流されたる血潮の斑點五十四ヶ所を發見し得たりと云ふ。又労働者が彼の如き惨敗を爲したる争議を回顧して尙賀川氏の無抵抗主義に一抹の不審をも懷くことなかりしや否やとの疑念の湧起せざざるに非らず。此疑念の當否は今に於ても判然せず、是れ賀川氏が労働運動の理論家たる以外に、人として神戸労働者の愛敬するところなるが故なり。賀川氏の魂が神戸の労働者に内在するが故なりと云はる。

神戸の労働者に對して東京より争議に赴けるものの觀察は「神戸の労働者に社會主義的色彩極めて稀薄なりしこと行動の實質的なりし事、法律の公正を信じて疑ふものの少かりしこと、小野心(虚榮?)家の労働者の間に尠かりしたため統制の充分行はれたること、持久的信念の豊富なりし事等を擧げ就中法律の公正を信ずるの念の深かりしは東京の労働運動者が等しく奇異の觀をなせるところなりしが如し。東京の運動者はそれ丈に今回の争議は労働者の階級意識を格段に深刻ならしめたりと信じつゝあるが如し。

賀川豊彦氏に依れば今次の争議は第一次的のものにして必ずや神戸の労働者は深刻なる今回の経験に鑑み、更に充實したる組織と内容とを整へ、近き將來に於て再び陣を張るべしと信じつゝあり。我國労働運動史の事實は八幡に於て、東京市電争議に於て、富士紡に於て釜石に於て一度惨敗したる罷工團の廢墟に再擧の意氣を見ず若干の過激者流と温順羊の如き労働者を残すを常としその除外としては纔に足尾を有するのみなるが、足尾には特有の事情あり、大體容易に其瘡痍の癒え難きを通例とする時神戸が賀川氏の言の如く更に二次の大罷業を起すことの可能なるや否やも興味深き謎なるが此問題の考察に就ても至誠を以て十年労働者に臨み來れる賀川氏の人格を重要な考慮の中に加へざるべからず。神戸の労働者が近く再び起つや、否やに拘らず神戸友愛會の旗幟は今尙衰へざるものあるを思はざるを得ず。